

学術資料

岡山の住宅地と植栽様式

溝口光弘¹・守田益宗²

A gardening style of the residential sections in Okayama City.

Mitsuhiro Mizoguchi¹ and Yoshimune Morita²

Abstract : We surveyed how the housing styles, old and new, are related with the presence/absence of gardens and gardening patterns in Okayama City. We found the following: (1) Houses built in a lot less than 100 m² in area tend to have no gardens. (2) Old residential areas tend to have fewer gardens, but more planters and pots, and a greater variety of plants per house. (3) New residential areas tend to have more gardens, and trees and plants rooted directly on the ground, and a less variety of plants but each species in a greater number per house.

I. はじめに

都市景観は、その土地の環境や歴史、住民の活動を反映して形成されてきたものであるが、植物は建築物などとともに都市景観の重要な構成要素のひとつといえよう。街のなかで生活している植物には昔からの社寺のみどりから鉢植えの園芸植物までさまざまなものがあげられる。飯泉(1979)はこれら街なかにみられる植物群を、社寺林など比較的自然的な環境に保たれている第1類から、帰化雑草などの第5類までに区分し、仙台および東京におけるそれぞれの植物グループの違いと両都市の特徴について述べている。沼田(1987)によれば、住宅地の植栽は、気候や土壌の条件によって一応の制約はあるものの、個人の自由意志に基づくものであり、個人的な興味や経済力によって個々に違うとしている。小松・守田(2003)の調査では、敷地面積が狭い場合は花物や観葉植物が多い傾向を認め、都市中心部では限られた緑化スペースを活用するため鉢物やプランターが多くなることを報告している。しかし、この調査では、住宅様式を細分しておらず、庭の有無にも注意がはられていない。そこで、今回は新旧の住宅地における住宅様式や敷地面積および庭の有無などを調査・比較する事により、

植栽様式にどのような違いがあるのかを調査した。

II. 調査地の概要

歴史的に早くから発展した街を古い街並(以下OGとする)とし、近年発展してきた街を新しい街並(以下NGとする)とし、OGには岡山市奉還町(OG1)、出石町(OG2)、南方(OG3)を、NGには岡山市伊福町(NG1)、学南町(NG2)、山陽町桜ヶ丘(NG3)を選んだ(図1、図2参照)。さらにこれら新旧各3地区からそれぞれ20の建物(計120)を選び出した。それぞれの地区の概略は岡山市の地名(1989)、山陽町史(1986)によると以下のとおりである。

・奉還町…岡山城下の西の平野部に位置する。「備陽記」によると江戸時代は戸数99軒、人口507人であった。明治8年(1875)に上伊福村と別所が合併し、同32年(1899)上伊福の一部が岡山市へ編入合併される。昭和40、同49年の住居表示事業で上伊福村は伊福町1～4丁目、奉還町1～4丁目などとなった。奉還町は、明治初期の家禄奉還によって得た奉還金を資本に士族が商店街を作った事にちなむ町名であり、現在もその姿を残す古い商業地区である。

¹ 700-0005 岡山市理大町1-1 岡山理科大学総合情報学部4期生² 700-0005 岡山市理大町1-1 岡山理科大学自然植物園

(2004年12月16日受理)



図1 岡山市内における調査位置図



図2 山陽町内における調査位置図

赤枠は古い街並み、青枠は新しい街並みを示す (<http://mapion.co.jp>) から作製

- ・出石町…岡山城下のやや西方、旭川沿いに位置する。城下近くということもあり侍並びに御扶持人、足輕屋敷などがあつたが、寛文7年(1667)の記事では既に上・中・下出石町に分かれ、上出石町の川端には町人も住みだした。また、この町は旭川で舟での荷役が行われ、主に塩を扱う問屋が栄えていた。嘉永7年(1854)には戸数217戸、人口586人と62あつた町人町のうちで第5位になるほどであつた。昭和39年に住居表示事業で大部分が出石2丁目となつた。昭和46年には旭川対岸の浜との間に鶴見橋がかけられた。この橋は国道2号線と国道53号線を結ぶもので車の交通量も多い。現在は住宅地と商業地が混在する近隣商業地域となっている。
- ・南方…この地区は城下町に続く街並であつた。「萬引高差引帳」(1684)、「備陽記」によると家数58軒、人口が336人であり、主に侍並びに御扶持人、足輕の屋敷からなつていた。真言宗、日蓮宗の寺社もあつたが、寛文6年に池田氏による寺院淘汰で廃寺となつた。明治22年(1889)に一部が岡山市になり、大正10年(1921)には編入された。地区の場所が早くから市街地化した。昭和

和39年にわたる住居表示事業で南方1～3丁目など多くの町に分かれた。現在は国立岡山病院などがある。岡山近隣商業地域である。

- ・伊福町…上記のように、昭和40、同49年の住居表示事業で上伊福村の一部が伊福町1～4丁目となつたこの地区では、第二次世界大戦後、現在の県立岡山工業高等学校の所在地に一時岡山県庁が移転したことがあり、他にも県立岡山短期大学や市立岡山工業高等学校・岡山西税務署など公的な建物がよくある。そのため周りは住宅地区になっている。
- ・学南町…南方の北部に位置する。この地域は本村、中井、四日市の3つの地区から構成され、北方村と呼ばれていた。文化年間(1804～1818)の『岡山藩領手鑑』によると総計で戸数213軒、人口は962人で大きな地区であつた。当時、村では紙漉きが盛んに行われ、藩が他領から呼び寄せた人たちもいた。また、木綿実油・種子油・胡麻油なども生産されていた。明治8年(1875)中井・四日市とともに北方村となり、大正10年(1921)に岡山に編入された。昭和40年(1965)と昭和48年(1973)

表1 地区毎の概略

	奉還町(n=57)	南方(n=50)	出石町(n=61)	桜ヶ丘(n=61)	伊福町(n=38)	学南町(n=50)
調査地周辺総敷地面積(平米)	2540.672	4316.372	4780.201	13267.567	7476.636	10017.307
1軒あたりの平均敷地面積(平米)	44.573	86.327	78.364	217.501	196.754	200.346
調査地の庭保有率	15%	15%	10%	100%	100%	30%
調査地の生け垣の保有率	0%	0%	0%	70%	15%	5%

の住宅表示事業で学南町や北方1～4丁目など多くの町に分かれた。現在は住宅地域である。

- ・山陽町桜ヶ丘…県の南部の東方向に位置する。この地域は備前国高物成帳によると鳥取庄尾谷村と称されていた。文化年間(1804～1818)の『岡山藩領手鑑』によると総計で戸数48軒、人口225人であった。村には田畑が広がり、明治初年の物産取調書によると現金収入は米穀物や絹・菜種などの商品作物が高かった。近年まで主に農業を主流とする町であったが、現在では徐々に住宅化が進み、岡山市へ通勤する人たちの新興住宅が増えている。

III. 調査方法

道を歩きながら目視できる植物を対象とし、植物の植栽形態と住宅の種類を調査した。調査にあたっては下に示すように、植栽形態を4種類に分類し、実際に観察されたポット、プランターなどの個体数と、そこにみられた植物の種類数を調べた。また、それぞれの住宅地の住宅形態を6種類に分類し、エリアごとに比較した。住宅の面積は株式会社ゼンリンの住宅地図をもとに求めた。

植栽形態(写真図版1)

- ・ポット…小型の鉢に1種類が植えてあるもの。主に円形のもの。(写真:1)
- ・プランター…ポットより大きく1種類植え、多種類寄せ植え関係なく植えてあるもので、主に長方形のもの。(写真:2)
- ・門前…門の近くで植え込みや生け垣など直植えされているもの。(写真:3,4)
- ・庭木(外周植栽)…庭に直植えされているもの。(写真:5)

住宅形態(写真図版2)

- ・長屋…一つ屋根の細長い家をしきって何世帯も住める

ようにした建物(写真:6)

- ・平屋…一階建ての建物(写真:7)
- ・和風個人住宅…外壁、塀などが主に木材で作られている一戸建ての住宅。また外観が日本家屋風にしつらえられた一戸建て住宅(写真:8)
- ・洋風個人住宅…和風住宅以外の一戸建て住宅(写真:9)
- ・集合住宅…マンションやアパートなど
- ・小店舗…商店兼住宅としての建物

IV. 結果および考察

1. 植栽形態について

OGで最も多かったのは植物の個体数、植物の種類数ともに道路沿いのポットでそれぞれ全体の76%, 71%であった。次に同じく道路沿いのプランターでそれぞれ17%, 21%であった。このエリアでは庭のある個人住宅において敷地内で栽培されている植物もわずかにあるが、大半は道路沿いで栽培されていた。一方、NGで最も多いのが、敷地内の庭木でそれぞれ75%, 71%であった。次に多かったのは同じく敷地内の門前の直植え植物でそれぞれ16%, 17%を示した。道路沿いで栽培されている植物はなく、すべてが敷地内で栽培され、かつほとんどが直植えされていた(図3)。すなわち、OGとNGでは植物の植えられる場所が異なり、OGではプランターやポット、NGでは直植えの門前の植物や庭木である。また、一戸あたりの栽培植物を個体数の平均(個体数平均)、種類数の平均(種類数平均)の比をつかって比較すると、OGのポットやプランターでは、植物の種類数に対する植物の個体数の割合はそれぞれ1.49, 1.09の値を示した。一方NGの庭木や門前の植物では植物の種類数に対する植物の個体数の割合はそれぞれ2.22, 1.92の値を示し、ポットやプランターよりも大きい値を示した。つまり、OGでは植物の個体数も多く

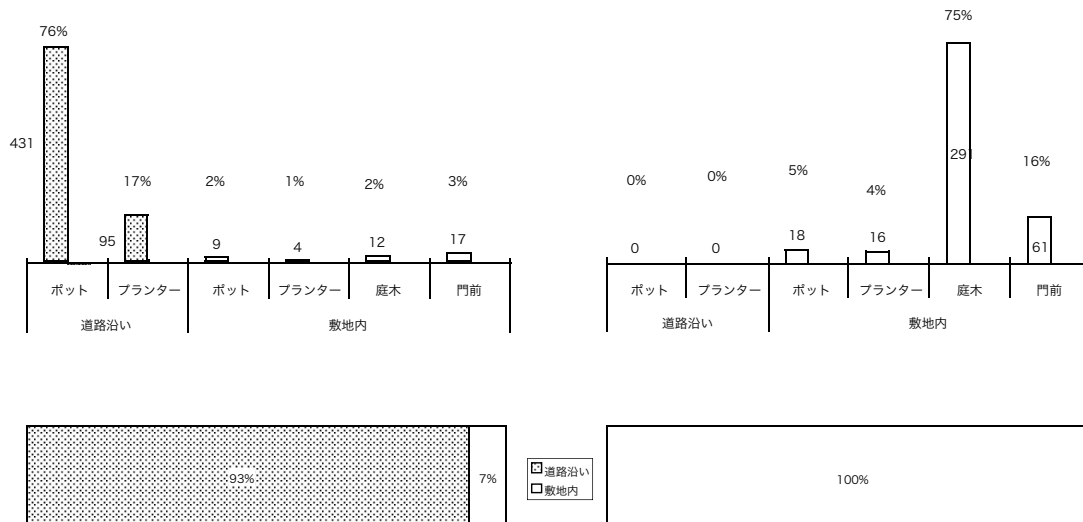


図3 古い街並み(左)と新しい街並み(右)における個体数でみた植栽形態

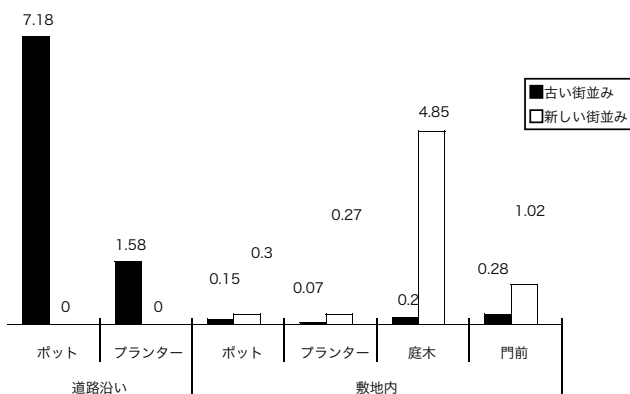


図4 一戸当たりの植栽個体数平均

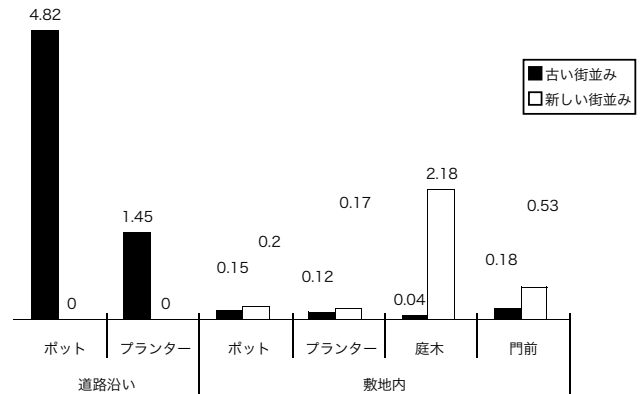


図5 一戸当たりの植栽種類数平均

様々な植物がみられるが、NGでは個体数が多くても種類数は少なく、少ない種類の植物を多く植えている傾向がみられる(図4, 図5, 表2)。

2. 新旧エリアの住宅の種類について

OGで最も多かった建物の種類は長屋であり、全体の半数の52%を占めた。次に和風個人住宅の28%であるが、そのうち庭のある住宅は48%であった。全体では庭があったのは13%であった。一方、NGでは長屋や平屋などは無く、洋風個人住宅と和風個人住宅がそれぞれ46%, 30%を占め、これら個人住宅が多くを占めている。また、すべての個人住宅で庭があった(表3)。次に、住宅の庭の有無による面積をみると、OGの庭が無い住宅は敷地面積が65~100平方メートルの住宅に最も多く、100~135平方メートルの住宅になるとほとんど庭をもち、135平方メートル以上の住宅はすべて庭をもつ。対してNGでは100平

方メートル以下の住宅は庭をもたない。ただし、集合住宅は一戸あたりの植物を栽培している割合(植物栽培率)が低く、植栽が共有部にある場合が多いので、一戸あたりとしては比較するのは適当ではないため、この比較からは除外してある(表4)。このことから敷地面積100~135平方メートルを境に庭の有無がわけられる(図6)。すなわち、この敷地面積を下回っている個人住宅が多いエリアでは、これまでに述べたOGの植栽形態の特徴が表れ、上回っている個人住宅が多いエリアではNGの植栽形態の特徴があらわれると言えよう。

以上の違いはそれぞれの街の発展の時期によるものや、建築基準法第53条で定められている用途ごとの建築面積の敷地面積に対する割合基準によって生じるものと考えられる。OGでは古い時代から発展した商業地と住宅地が混在する近隣商業地域にあたる。この場合、敷地面積の80%以内であれば建築物を建てること

表2 植栽植物の個体数平均と種類数平均の比

栽培場所 植栽形態	道路沿い		敷地内			
	ポット	プランター	ポット	プランター	庭木	門前
OG	1.49	1.09	1.00	0.58	5.00	1.56
NG			1.50	1.59	2.22	1.92

(個体数平均/種類数平均)

表3 住宅種類の割合

	和風個人住宅	洋風個人住宅	集合住宅	平屋	長屋	小店舗
古い街並み	28			13	52	7
新しい街並み	30	47	23			

(%)

表4 住宅の種類と植栽率

種類	植栽率(%)
和風個人住宅	97
洋風個人住宅	100
集合住宅	8
平屋	75
長屋	97
小店舗	100

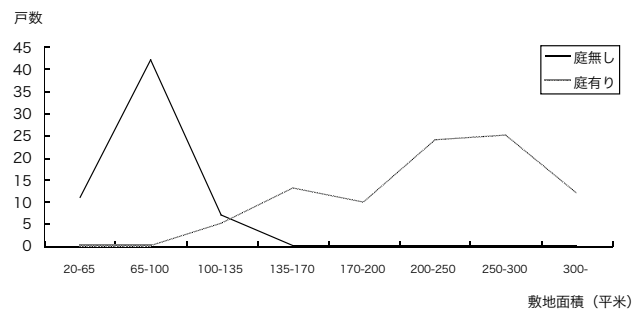


図6 敷地面積と庭の有無の関係

のに対し、NGはほぼ住宅専用地域である。住宅専用地域では都市計画ごとによって割合はことなるが、最大でも60%以内(特定の建物を除く)と定められている。このため同じ種類の建物であっても敷地面積によってOGとNGの庭の有無や面積が違ってくるのであろう。

V. 総合考察

上記2の結果から、敷地面積が広いNGの個人住宅では、塀や庭などに植物を栽培するだけのスペースがとれるため、庭木や生け垣など比較的空間が必要な植栽形態が選択されていると考えられる。これらの植栽形態は、プライベートな空間を守るため、遮断目的で植えられることが多いのであろう(小松・守田, 2003)。沼田(1987)によれば、これらの植栽はその土地の景観を構成し、公共性のある町の緑に寄与するとしている。今回の調査でも、これらの植栽形態はNGの景観を特徴づけていることを物語っている。OGでは、敷地面積が狭く、庭も限られているので、植栽は限られたわずかなスペースとなる。そのため栽培場所が小さくてもすむポットやプランターが選択されていると考えられる。生活スペースと植栽場所を共有することが多い生

活スタイルをとらざるをえないこれら住宅では、必要があれば直ちに配置換えができることに加え、手軽に植え替えができ、様々な景観をつくり出すことが可能のため、これらの植栽形態が好まれていると考えられる。

VI. おわりに

今回の調査では、調査日時の間隔が長すぎたため個々の植物の名前を調べるができなかった。これは、ポットやプランターでは季節により植え替えなどが頻繁に行われるからである。そのため、新旧の街並みと植物の嗜好の有無との関連性を詳しく捉えることができなかった。また、各街についての現代までの変遷が調査不十分であるため、街の成り立ちが与える植栽形態への影響が十分検討されていない。さらに、個人住宅のみに着目したため、集合住宅ではどのような傾向があるのか未解明である。今後はこれらの点についてさらに調査していきたいと考えている。

まとめ

・岡山市内の調査区では、敷地面積100平方メートル以上では庭をもつ建物があらわれ、それ以下ではみられ

ない傾向がある。

- ・古い街並では庭が少なく、植物は道路沿いでポットやプランターに多く栽培され、一戸あたりに様々な植物が栽培される傾向がある。植物を栽培するスペースが限られているため、配置換えや植え替えが容易であり、栽培場所の小さいポットやプランターが選択される傾向がある。
- ・新しい街並では庭をもつ家が多く、植物は敷地内で庭木や門前に直植えて多く栽培され、一戸あたりに少ない種類で個体数を多く植える傾向がみられる。植栽スペースが広くとれるため、栽培スペースの大きい庭木や生け垣が選択される傾向がある。

引用文献

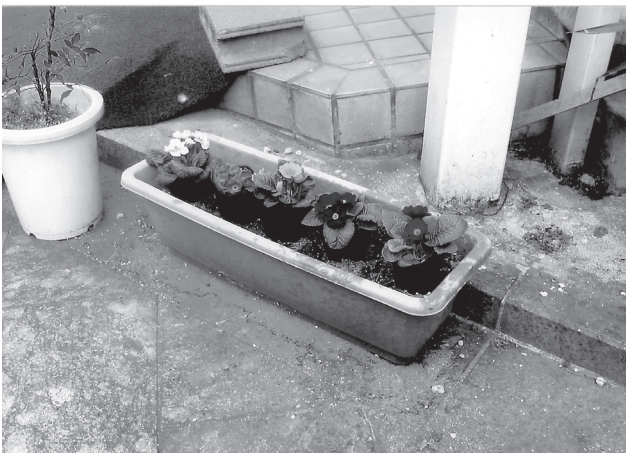
- 飯泉 茂(1979)街なかの植物-仙台市の場合-。 科学, 49:671-674.
- 小松 冴・守田益宗(2003)岡山における都市住民の園芸植物の好みとその地域性。 自然植物園研究報告, 8:23-29.
- 沼田 真(1987)「都市の生態学」。 225pp. 岩波新書
- 岡山市(1989)「岡山市の地名」。 924pp. 角川書店
- 山陽町史編集委員会(1986)「山陽町史」。 1102pp. 山陽町



1. ポット



4. 生け垣



2. プランター



5. 庭木



3. 門前の植込み



6. 長屋



8. 和風個人住宅



7. 平屋



9. 洋風個人住宅